

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 甲斐田きよみ

論 文 題 目

世帯内意思決定への女性の関わり方  
～ナイジェリア北部ハウサ社会を事例として～

Women's Participation in Intra-household decision making: The case of Hausa in Northern Nigeria

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	山田	肖子
委員	名古屋大学	教授	藤川	清史
委員	名古屋大学	教授	伊東	早苗
外部委員	龍谷大学	教授	西川	芳昭

# 論文審査の結果の要旨

## 1. 本論文の構成と概要

本論文は、世帯内の夫妻間の関係に着目し「世帯内の資源分配をめぐる意思決定において、女性が望む資源を獲得する要因を明らかにする」ことを目的としている。ナイジェリアにおいては、世帯収入が構成員に別々に管理されているが、これまでの研究は「世帯」が単位となっているため世帯内の構成員が意思決定過程でどのような交渉を行っているかについて踏み込んだ分析がされることは少なかった。開発援助プロジェクト等でも、世帯を一つの単位とみなし、女性の家計への貢献や意思決定における役割への認識が不足していたために、期待した結果が得られないという指摘もされてきている。

このような認識に基づき、本研究では、ナイジェリア北部のカノ州において、同州の人口の大部分を占めるイスラム教徒のハウサ人社会に焦点を当てて、世帯内資源分配をめぐる意思決定プロセスを妻と夫の双方の視点から分析した。フィールドワークは、2010、2011年に3度実施し、質問票、半構造型個別インタビュー、直接観察の手法を用い、意思決定に関する行動や認識に関する質的調査を行った。

世帯内の資源分配をめぐる意思決定における交渉プロセスを明らかにするため、3つの副研究課題を設定した。副課題1「女性が収入を獲得することは、世帯内資源分配をめぐる意思決定への女性の関わりに、どのように影響するか」においては、女性の経済活動の状況や収入の用途をジェンダー役割の視点から分析し、女性が得る収入が世帯のニーズ充足に対してどのような意味があるか、世帯内での女性の意思決定力に対して、どう影響するかを検討した。副課題2「世帯内意思決定で、女性が意見を伝えやすい話し合いの様態とは、どのようなものか」は、夫妻がどのような話題をめぐって異なる意見をもつか、どのようなプロセスを経て夫妻が同意する、或いは同意しないのかという観点から、妻と夫から聞き取った世帯内の様々な内容の意思決定プロセスにおける交渉を「反論、懇願、回避、従順」の4種類に分類し、それぞれのパターンを特徴づける要因を抽出した。さらに、副課題3「世帯内意思決定で、意見を言える女性は、どのような特徴があるか」を設定し、妻が世帯内の意思決定へより関わる場合の夫妻の特徴を、Sen (1990)の協力的対立モデルを適用して分析した。

協力的対立モデルは、妻の交渉力を決定する要因として、①妻の決別点の高さ、②妻の世帯への貢献認識の高さ、③妻の自己利益への認識の高さを提起している。「決別点」は交渉における個人の脆弱性または強さを示し、協力しなかった場合の不利益が多い場合には決別点が高くなる。女性の場合には、男性より決別点が高い傾向があるとされる。

本論文では、副課題1で取り上げた女性の経済活動を含め、夫および妻の収入、教育歴、初婚年齢や年齢差、子供の数、拡大家族との同居などの要因が、交渉における女性の決別点や世帯への貢献意識、自己利益への認識にどのように関わっているかを、交渉アプローチ（反論、懇願、回避、従順）や夫婦間での話し合いの内容ごとに整理した。また、既存の協力的対立モデルが示している3つの交渉力決定要因に加え、④夫の交渉力、⑤妻・夫のジェンダー役割の変化の受容の2点を加え、ナイジェリアのハウサ社会において変化しつつある男女関係やジェンダー規範を含めて分析することを試みた。

結論として、妻が「反論アプローチ」を採る場合、妻、夫ともに教育レベルが高く、拡大家族の同

# 論文審査の結果の要旨

居が少ない傾向が見られた。より夫に意見を言う女性には、夫との間に話しやすい環境があり、夫が妻の話を聞く姿勢を示し、妻自身も意見を述べるだけの自信と能力を備えている例が多く、経済力、教育レベル、自己認識、家族構成などの影響が大きいことがわかった。ただし、「反論アプローチ」「懇願アプローチ」による話し合いの環境が形成される場合に、必ずしも女性が表立って意思決定をすることを意味せず、妻は夫に決定させることで、「意思決定するのは家長である夫」という規範を守り、「夫を敬う妻」という立場を守り、ハウサ社会のジェンダー規範を守ることで、自らの周囲からの尊厳も維持する戦略をとる場合があることがわかった。

本論文は8つの章で構成される。第1章の序論において課題設定・研究の意義と仮説・方法が説明され、第2章では、開発における世帯とジェンダー格差について主要な理論を分類・整理し、「世帯」の定義および「ジェンダー役割」について、第3章では、世帯内資源分配と意思決定について先行研究を整理し、本研究の位置づけを明らかにした。また、本研究で扱う「資源」の概念も定義した。1～3章で整理した枠組みに基づき、第二部(4～7章)は、事例研究の結果を提示した。第4章では、調査手法と対象地の概要を説明し、第5章は、「女性の収入獲得と世帯内意思決定」と題し、主に副課題1についての調査結果をまとめた。第6章「話し合いの様態と世帯内意思決定」は副課題2について、第7章「女性の特長と世帯内意思決定」は副課題3について扱っている。これらの複数の章での調査結果を総合する結論が第8章に提示されている。

なお、本博士論文のテーマに関連した論文は、既に『国際開発研究フォーラム』、『比較文化研究』、『スポーツとジェンダー研究』の3誌に掲載されている(いずれも査読付き)。

## 2. 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- (1) 従来の研究では、「世帯」を分析単位とすることが多く、世帯内のジェンダー間の力関係に着目した研究が少ない。また、世帯内に複数の意思決定参加者が存在するという点に注意が払われず、世帯内意思決定プロセスにおいてどのような要因が影響するかについての分析が不足している。本研究は、ブラックボックス化されてきた世帯内の力関係と意思決定のプロセスを解明しようとした点で重要な貢献が見られる。
- (2) 世帯内意思決定の交渉プロセスをあきらかにした定性的研究は少なく、本研究は、夫妻双方の定性的データを細かく分析し、交渉に影響する要因を特定しようとした点で独自性が高い。

ただし、本論文は、以下の点において改善すべき点があることが指摘される。

- (1) 本論文では、世帯内の「資源」について、“経済的資源だけでなく、人的、文化的、社会関係資源も含め、現在の状況だけでなく潜在性に関わるものも含める”と定義しているが、分析の中で「資源」が「現金収入」と同義化される傾向にあり、一方、本来の定義であれば、資

## 論文審査の結果の要旨

源の一部と考えられるべき、夫婦外の人間関係や情報、教育などが資源とは別の要因とみなされている。また、「資源分配をめぐる」意思決定に特化するのか、世帯内の意思決定全般の話をしているのかといった点でも、枠組みにブレが見られる。

- (2) 小規模のサンプルに対する詳細な聞き取り調査に基づく定性的調査は、本来、仮説検証型の演繹的分析を目的とせず、聞き取った内容を基に組み立てる帰納的な分析を行うものであるが、分析者自身が当初から想定している分類に落とし込む傾向が見られた。
- (3) ナイジェリアのハウサ社会で詳細な調査を行ったにも関わらず、結論でハウサの独自性と世帯内のジェンダー関係に見られる一般的傾向を明確に分けて提示していないために、一般的、抽象的な結論に見えかねない。

このように、分析の提示方法には改善の余地は見られるものの、ナイジェリアのハウサ社会において、世帯内のジェンダー関係という非常に繊細なテーマでの聞き取り調査を行ったことは、執筆者の開発援助プロジェクト専門家としての経験と人間関係があつてこそその成果であり、その学術的貢献、および援助プロジェクト実施者に対する新しい視点の提示という点での意義の高さを阻害するものではない。確立された分析手法が少ない分野で、様々な研究から着想を得て試行錯誤しており、博士論文として期待されるレベルには十分に到達していると判断される。

### 3. 結論

以上の評価により、本論文は、博士（国際開発学）の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。